

[研究論文]

内田惣右衛門の天保飢饉時における救貧活動

大 塩 まゆみ

はじめに

江戸時代後期の越前屈指の豪商であった廻船問屋内田家は、福井藩の御用達商人であり、三国湊で頭町人として代々町内自治に携わっていた。1760（宝暦10）年に福井藩の御札所元^メ役18人のうちの一人となり、1788（天明8）年に、藩の御内御用達として任命された（印牧1964：446、1043）。1819（文政2）年には、福井藩の領内御趣法掛りのうちの一人に任命され（印牧1964:1043）、内田曾平家督の1830（文政13）年から御札所元^メ役頭取御免、頭取次席となり、知行高500石の三国最高の富豪となった（吉田1975：52-54）。

江戸中期以降の藩の御用達商人というのは、特権を与えられる一方で、多額の御用金を納めさせられ、支給されるべき俸禄（給料）も借り上げられたまま返済されず、悪化する藩財政のたて直しに寄与したといわれている。藩の御用達商人であり御札所元^メ役に任命されていた内田惣右衛門は、そのような藩財政維持に貢献しただけではなく、町内自治の役人の立場として困窮者救済にも尽力した。さらに巨額の私財をはたいて個人的にも困窮者の生活を支援した。しかも、名誉心や優越感から私的な救済活動をしたのではなく、自分の名前を出すことを極端に嫌ったので、六代目内田惣右衛門は、“陰徳の人”として尊敬を集め秘かに語り継がれている（和田幽玄1934）。惣右衛門百回忌には、和田幽玄が、2冊の伝記で、“陰徳の豪商”の富豪道を説き、「郷土の先徳」「文化の恩人」と絶賛した¹⁾。また、江戸時代に、内田惣右衛門が、いかに巨額の出費をしたかについては、『三国町史』にも記されている。

そこで本論では、内田惣右衛門が、どれくらい多くの困窮者にいかほどの出費をしたかを江戸時代の天保の大飢饉前後に焦点をあてて検討し、具体的な救貧活動を詳らかにしたい。

そのために、内田家に関する史料の中から、次のものを文献とする。一つは、写本をもとに編纂された『三国町史料 町内記録』収録の「文政七^年ヨリ嘉永三年迄三国湊記録（支配人日記）」（三国町史編纂委員会編、1973（昭和48）年発行）であり、この記録より内田家の貢献度を検証する。さらに、『越前三国 内田家日記一』『越前三国 内田家日記二』（東北学院大学中央図書館所蔵の写本）から、具体的な救貧活動の詳細を明らかにしたい。尚、本論で、

受付日 2007.11.1

受理日 2007.12.17

所 属 福井県立大学看護福祉学部社会福祉学科

「内田本家」とあるのが、内田惣右衛門が当主の内田家である。(本稿での引用文の表記に関しては、注2のとおりである)。



写真1 加賀の北前船主によって建造された倉庫を利用した「小樽市博物館」
(2006年3月21日、筆者撮影)

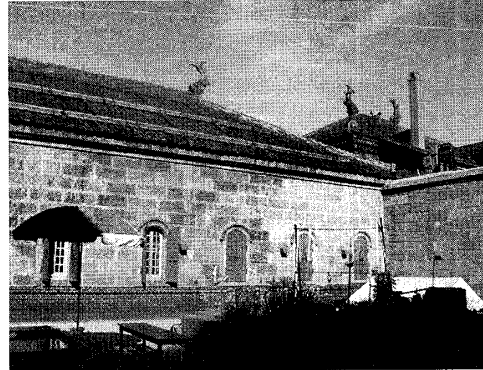


写真2 若狭(福井県)産の瓦とシャチホコが名物の小樽市博物館建物
(2006年3月21日、筆者撮影)

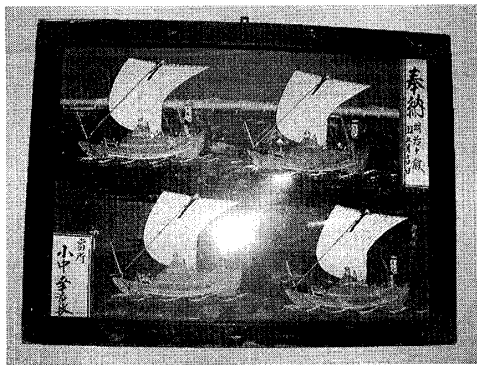


写真3 小樽市博物館に展示されている北前船の舟絵馬
(2006年3月21日、筆者撮影)

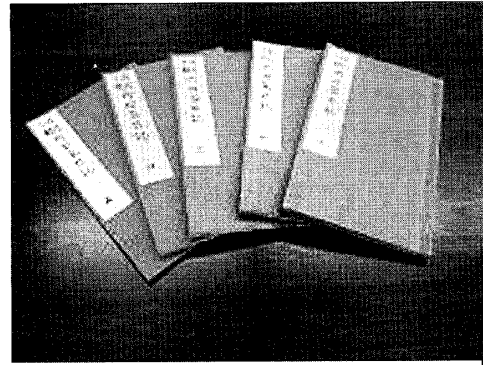


写真4 東北学院大学中央図書館に所蔵されている『越前三国 内田家日記』の写本
(2006年8月24日、筆者撮影)

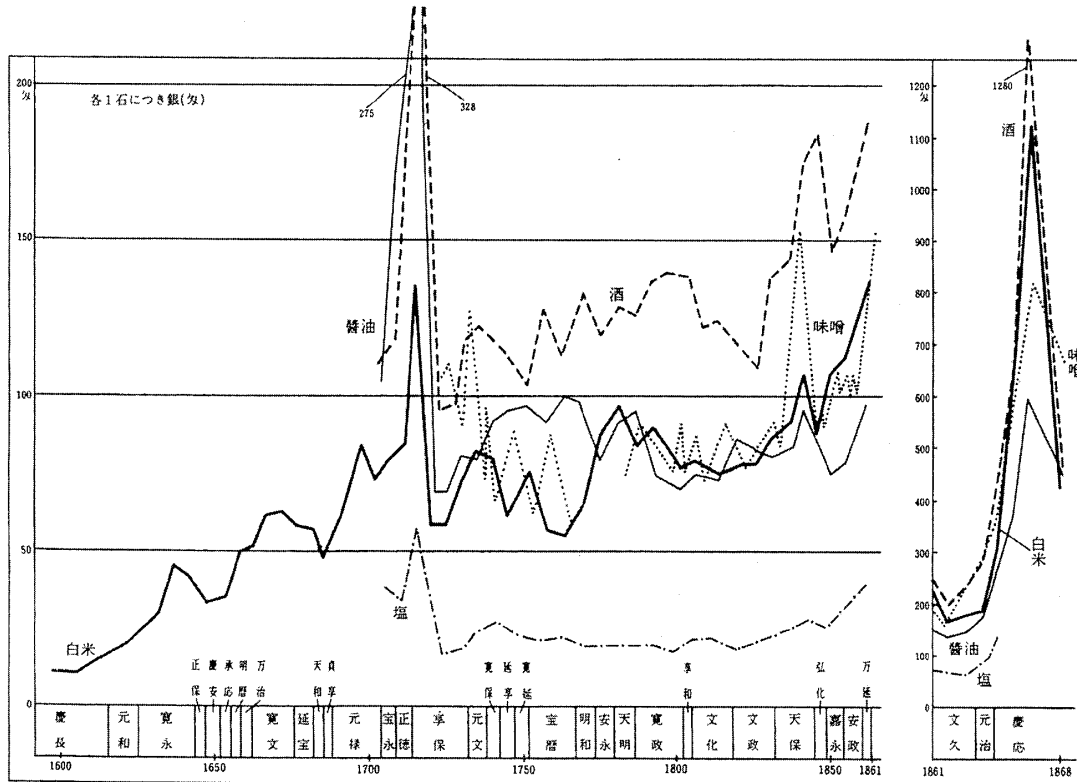
1. 1824(文政7)年より1850(嘉永3)年までの「三国湊記録(支配人日記)」から

「文政七^甲年ヨリ嘉永三年迄三国湊記録(支配人日記)」には、町の行事や出来事、備品購入や工事・修復事業等について、年次を追って記録されている(実際には、1851(嘉永4)年までのことが記されている)。これは、町の支配人が町内の諸事や執務内容を綴ったもので、備忘のため書き留めた帳簿である。その目録の中から救済事業に関連するものに着眼すると、「御貸米」「町之貸米」「米別売場立」「煎粉施行」「大麦施行」「粥施行」「炒粉施行」が行われていたことがわかる。

「施行」とは、仏教用語で功德を積むために物を施し与えることをいう(中田祝夫・和田利政・北原保雄1994:909)。また後述する「合力」とは、援助・手助けをすることである(池田こういち2006:162)。ここでは、このような救済事業を取り上げて、内田惣右衛門の貢献度を検証する。

内田惣右衛門の天保飢饉時における救貧活動

図1 江戸時代の物価の変動



出所：若尾俊平（1991）『図録古文書入門事典（新装版）』柏書房、p. 139.

江戸時代は物価の変動が激しく、庶民の生活を混乱させた。いかに変動が大きかったかについては図1がめやすとなるが、かなりの地域格差があったようだ。

1829（文政12）年春に、福井藩三国では、諸藩の蔵に取められた年貢米である御蔵米の相場が32～34匁になり（中田・和田・北原1994:526）、観音堂の門前や清円寺町辺りの難儀者（生活困窮者）が、支配人・役人方へ貸し米を願い出てきたという。そこで、役人・支配人が熟談して、御蔵古米754俵31匁を買い受け、代銀23貫匁余りを支配人13人で分担したが、表向きは御上よりの貸し米とした（三国町史編纂委員会編1973：22）。さらに貸した米の代金を返済できない人の損金1貫12匁3分も支配人13人で負担した。下記のように、その中で出費が一番多かったのは、内田惣右衛門であった（三国町史編纂委員会編1973：23）。

内田惣右衛門	266匁7厘
内田平三郎	164匁4厘
津田彦右衛門	102匁5分
中嶋十左衛門	75匁1分8厘
津田善右衛門	61匁4分9厘
藤田久四郎	57匁4分2厘
三国与兵衛	58匁7分9厘

松尾吉右衛門	53匁4分9厘
室屋武右衛門	38匁9分6厘
池上屋平七	38匁9分6厘
宮腰屋五郎兵衛	34匁2分2厘
番上屋七左衛門	34匁2分2厘
紙屋惣八	25匁9分6厘
	計13人

1831年春には、米相場の値段が41匁になり、困窮する人が続出したため、役人・支配人が寄り合いを開き、500俵を買い入れて安値で売り、その差額の損金を負担した。

1833（天保4）年8月には、米の値段が39匁になり、難渋する人のために先例の通り米の別売りを設け、損銀3貫184匁余りを両内田家等6軒で負担した。また、秋には米別売りの他にいり粉施行を行い、町内28人で費用負担した。その中で出費が最も多かったのは、内田惣右衛門であった。トップ3は次のとおりである（三国町史編纂委員会編1973：35）。

内田惣右衛門	900匁
内田平右衛門	550匁
津田彦右衛門	350匁
以下省略	計28人

1834（天保5）年には、3月から4月にかけて40日間のいり粉施行を行った。

1836（天保7）年の米価は、3月～5月には35～37匁であったが、5～7月には、40匁前後になり、8月には50匁に、12月には77～78匁まで値上がりした。このように、半年で2倍以上の値段に急騰したので、貧困者は生活難から不穏な気配をおこし、貸米を願い出できた。そこで、8月頃より役人達が、難渋者に大麦を施した。10月に福井藩では米の他領への移出を禁止して米を確保し、米を使う酒造も禁止した。

また金津奉行所が、困窮者の騒擾を未然に防ぐために、米の別売りを支配人らに求めてきたので米別売場を設けた。これは、表向きは奉行様の思召しとしたが、損金は有志達で負担した。

1837（天保8）年正月にも米別売場を設け、煎粉施行をした。前年の出費については、13人の支配人の他に上新町の15人で15貫匁を負担した。上新町の15人の負担者の最多額は、下記のように、やはり内田惣右衛門であった（三国町史編纂委員会編1973：40-41）。

内田惣右衛門	4貫500匁
内田平三郎	2貫700匁

内田惣右衛門の天保飢饉時における救貧活動

津田彦右衛門	2貫800匁
中嶋七郎兵衛	1貫250匁
藤田久四郎	1貫150匁
以下省略	計15人

1837年は無類の凶作で、1838年正月には米の値段が85匁に上がった。諸物価も高騰し、難渋極まりない困窮者が増加し餓死者も続出したので、米の別売り場を設けた。そのため61名で銀32貫匁を抛出したが、最多額を負担したのは、下記のように内田惣右衛門であった(三国町史編纂委員会編1973：42-43)。

内田惣右衛門	7貫800匁
内田平三郎	4貫750匁
津田彦右衛門	3貫250匁
以下省略	計61人

3月には、米1俵につき80匁で売買するやうにとの藩から御触れがあった。しかし、内々に90～110匁の闇値での売り買いが行われていた(佐久高士(1966：40)。このような異常事態では、米屋も商売にならないので、御蔵米の払い下げの願書を出した。しかし、払い下げられても、米価は上がる一方であった。乞食や死人が続出するようになり、勝授寺では、粥施行が行われた。また、米別売り場を設け、損銀は例年のごとく頭町人等で負担した。7人で合計5貫620匁を出費したが、トップは内田惣右衛門であった(三国町史編纂委員会編1973：46)。

内田惣右衛門	1貫900匁
内田平三郎	1貫190匁
津田彦右衛門	820匁
中島七兵衛	550匁
藤田久四郎	530匁
松尾吉右衛門	450匁
津田七右衛門	180匁
	計7人

1848(嘉永元)年12月には、米価が90匁になり、昨年どおり粥施行をした。1人あたり白米1合を^{みそか}毎日の日に施すことになった。その米の代金は町の役人・支配人ら有力者から取り集めたが、次のとおり、最多額を負担したのは内田惣右衛門であった(三国町史編纂委員会編1973：67-68)。

内田惣右衛門	銀900匁
--------	-------

三国与兵衛	銀900匁
内田平三郎	銀525匁
中島十兵衛	銀350匁
津田彦右衛門	銀350匁
藤田久四郎	銀350匁
木谷甚右衛門	銀200匁
津田七右衛門	銀150匁
宮腰屋五郎兵衛	銀150匁
室屋武右衛門	銀150匁
池上屋平七	銀150匁
石屋文右衛門	銀150匁
菅野屋又右衛門	銀150匁
計13人	合銀4貫475匁

1851（嘉永4）年も米価が高値となり、支配人達が寄り合いを開いて相談し、2月に粥施行をした。その時の粥米代の費用負担は、次のとおりで、やはり内田惣右衛門がトップだった（三国町史編纂委員会編1973：68-69）。

内田惣右衛門	950匁
三国与平	950匁
内田平三郎	570匁
中島十平衛	390匁
津田彦右衛門	390匁
藤田久四郎	380匁
以下省略	計16人

以上のように、1824（文政7）年から1851（嘉永4）年までの「三国湊記録（支配人日記）」に救貧のための費用負担について記述されているが、拠金者名が出ている7ヶ所中、すべてで惣右衛門が最多額負担者となっている。そのうち2回については、三国与平と同額になっているが、全体では内田惣右衛門の出費額が抜きん出ている。三国与平の出費額が多くなったのは後半であり、中盤では名前が出てない。今回は、紙面の都合上、拠金者全員の名前を表記していないが、多くの場合、出費者上位は内田本家と東西内田家である。また、前述した困窮者救済目的以外の別の用途でも有力者から多額の出資がされているが、その場合も、内田惣右衛門が最高額を出している。

内田惣右衛門の天保飢饉時における救貧活動

江戸幕府は、中期頃から享保・寛政・天保の3大改革をして、幕藩体制再建を目指し行財政の立て直しを行なった。しかし、効果はあがらず、飢饉のたびに各地で餓死者・困窮者が増加し、一揆が頻発した。この記録に記されているように、三国でも天保年間に入る前から難儀者が続出していた。そのため、町内自治を預かる役人の立場として、内田惣右衛門が率先して救貧事業を行い、その費用負担についても筆頭になって担っていたことがわかる。

次に、この時期の三国の救貧活動をさらに詳らかにするため、『越前三国内田家日記一、二』を調べる。

2. 『越前三国 内田家日記一』1835（天保6）年～1836（同7）年までの日記（東北学院大学中央図書館所蔵）から

『内田家日記一 天保六年末六月より同七年申極月迄之日記』によると、六代目内田惣右衛門が、父曾平の病気のために家督を相続したのが、1835（天保6）年であった。その後、どのような救済活動を行ったのかを、この史料から調べる。

1836（天保7）年申5月には、米の値段が37～38匁になったが、曾平一周忌の法事の節に、次のような施行をした。「一人五匁宛百三十七人ニメ六百八十五匁口乞食共へ1升宛米メ三十五俵代一メ三百匁当余」。つまり、1人5匁を137人分施行し、合計685匁になった。乞食には、米1升宛35俵を用意し、代金は300匁になった。

7月には、米価基準が42～43匁となったので、東西内田家とともに、下夕町と上新町の困窮者に一人あたり10匁宛施した。家数は153軒であった。1人あたり10匁出費の内訳は、内田本家が6匁5分、東内田が3匁、西内田が5分であった。153軒分の内田本家の負担は、994匁5分であった。

さらに、その後、米価が47～48匁に高騰した。そこで7月末に、金津奉行から御用達7人衆が呼び付けられた。米が払底しているので、米を買い置くことを求められ、また貧民に施行するための費用として7人に銀1貫965匁の上納を命じられたのである。その内訳は、次の通りであった。

内田惣右衛門	800匁
内田平三郎	400匁
中嶋十左衛門	240匁
津田彦右衛門	240匁
藤田久四郎	160匁
津田吉右衛門	80匁
三尾野ヤ喜右衛門	45匁
計	1貫965匁

8月25日には、新米が57匁になり、翌26日には56匁となり、28日には45匁になった。米価が不安定で、恒常的な生活困窮者が続出していたので、妙海寺にて粥施行を実施した。内田本家より銀250匁、東内田から100匁で、合計350匁を拠出した。

これ以外にも8月には「質置女共へ大麦二升宛て合力」とあり、食糧を支援し、長屋の在住者にも1軒あたり5升宛て9軒に合力（援助）した。また、合力願い出に、7～9月まで3回施した。ただし、1度に1軒あたり5升宛てで、最初は150軒ばかりを支援し、その後2回は、それより数が増えたという。

また、大麦67俵の代金計1貫800匁余りを内田惣右衛門、内田平三郎、及び津田彦右衛門、津田吉右衛門、中嶋十左衛門、藤田久四郎の6人で分担した時に、内田惣右衛門は、675匁を負担した。11月には出村の困窮者140軒に1軒あたり5匁宛て、銀700匁を世話人に渡したと記されている。

10月より米の値段が高騰し続け75匁ほどになったので、前述の6人が寄り合い相談し、米の別売り場を設け、いり粉施行を行うことにした。損金は、支配人13人と上新町の有力者等合計15人でもった。この時、表向きは、「御上の御仁政」とした。これは、「三国湊記録（支配人日記）」の1836年についての記述と一致する。このいり粉施行と米別売り場の費用負担額については、下記のように記されており、2. で前述した「三国湊記録（支配人日記）」の記録とは、金額に若干の誤差がある。写本を元に行っているため、写し間違いもあるかもしれないと考えられるが、いずれにせよ、内田惣右衛門がトップである。

内田惣右衛門	4貫400匁
内田平三郎	2貫700匁
津田彦右衛門	1貫800匁
中嶋七郎兵衛	1貫250匁
藤田久四郎	1貫150匁
三尾野屋喜右衛門	900匁
以下省略	計15人

12月にも粥施行をし、内田本家が60匁、東内田家は30匁を合力し、米30俵分の約束をした。また、宿浦の難儀人15人に、1軒宛5匁、計75匁を預けた。また、米ヶ脇浦の難儀人にも同様に110匁を、新保浦難儀人にも銀250匁を合力した。さらに、真龍寺隠居へ10匁のほか5人に銀20匁合力し、近隣の難儀人を支援している。これ以外にも、難渋している人々に、粉や米などを分けている。

そして年末には、下夕町・上新町で計250人と世話人2人に対して、1人について10匁宛で施行した。1人についての負担割合の内訳は、内田本家が5匁5分、東内田が2匁5分、中嶋

内田惣右衛門の天保飢饉時における救貧活動

が1匁5分、西内田が5分であった。

最後に、「是迄合十四貫匁余申年施行」と、14貫匁余りを施行のために出費したことが記されている。

以上、「施行」や「米別売場」といった救貧事業に着眼して、内田本家がいかほど拠出したかの実績を記した。これによると、1836（天保7）年年末には、下夕町上新町で計250人と世話人2人の計252人に対して、1人について10匁宛で施行している。一人あたりの内訳は、内田本家が5割5分で、東内田家が2割5分、西内田家が5分、中嶋家が1割5分の負担をした。7月に153軒に対して各10匁ずつ出費した時の内訳は、内田本家が6匁5分、東内田が3匁、西内田が5分であり、中嶋家が入っていない分、内田本家と東内田家が多く負担していた。これまで137人、153軒、150軒等と難儀人の人数や施行の対象世帯数が書かれているが、多少の増減があるもののいずれも100人以上に昇っており、年末には、約250人となっている。

これらの多くは、「町中合力」といわれる地域の富裕層から貧困層への救済であるが、内田家では、1836（天保7）年にみられるように、曾平一周忌の法事の際にも施行をしていた。

1833～39年には全国的に飢饉が続き、各地で一揆や打ちこわしが頻発した。特に1837（天保8）年は、物乞いに出る人や餓死者が頻出し、それまで以上に一揆が激化した。困窮する貧民を救済するため陽明学者大塩平八郎が大坂で乱をおこし、それに共鳴した国学者生田万が越後柏崎で乱をおこしたのも1837（天保8）年であった。

そこで、1837（天保8）年の三国での救貧の実態を『越前三国 内田家日記二』により調べる。

3. 『越前三国 内田家日記二』1837（天保8）年の日記（東北学院大学中央図書館所蔵）から

1837（天保8）年の『越前三国 内田家日記二』には、『越前三国 内田家日記一』よりも、「施行」などの救貧事業についての記述が多く見られる。また、個人的な金品施与についての記述もある。そこで、救貧活動の記録をピックアップし、具体的にどのようなことが行なわれたのかを明らかにしたい。（この日記では、日付順に記載されていず、過去に遡っての記述も多い。本稿では、大筋では月日の経過にそって内容を整理するが、必ずしもその通りにならない部分もある）。

日記の最初に、「惣右衛門十四歳」と記されているが、前述のように、父の病気のために六代目惣右衛門が若くして家督を相続したのが、1835（天保6）年であった。

1837年は正月から正智院で粥施行が行われ、それに加わり、15匁を合力している。というのも、「昨年無類之凶作ニ而米穀ハ勿論雜穀等ニ至迄諸色高値に付末々者難洪至極之為^{ていやく}躰可及渴命ニ程之処格別之仁恵を以って粥煎粉等を施し夫々手当致遣…」とあり、米も雜穀も高値で、

命が危ぶまれるほど生活に苦しむ人が多く、いかに昨年の凶作が厳しかったかが物語られている。

昨年12月より中嶋家と内田本家、東内田家等が施主となって行った施行が始まっている。2月初めには、米相場は90匁で、生活に困窮する人が続出していた。そこで、30年以前に内田家にいた下男に、10匁合力した。また、中嶋七郎兵衛殿へ「二貫八百五十匁米 三十俵代九十五匁」計3貫匁を出費している。この米30俵は、金鳳寺で昨年12月1日から当年2月まで行った粥施行のための費用であった。この時、中嶋七郎兵衛が頭取であったので代金を渡したのであるが、東内田家が20俵分参加したことも記されている。

2月末には銀30匁を合力し、また銀45匁3分初1俵代を永正寺に出入りしている人のうち、難儀者に心付けとして授けている。さらに、銀1貫864匁4分5厘下夕町の難儀人170人と上新町の難儀人167人、計337人とその他2人で合計339人に出している。1軒あたり10匁で、その負担の内訳は、2匁5分を東内田家が、1匁5分を中嶋家が、5分を西内田家が、残り5匁5分が内田本家の割り当てであった。さらに、2月末には金70両を福井東御坊の国中への施行加入のために内田3家より出しており、25%は東内田家が、5%は西内田家が出し、残りは内田本家が負担した。

また、昨年の飢饉時に、内田惣右衛門らが格別の仁恵をもって餓死寸前の人々を救済したという奇行に対して、寺院の御門跡（管長）より、縮緬4反（本家2反、東西内田家に各1反）が贈られた。

3月に行われた施行には、1貫396匁、米15俵代93匁を出しており、東内田家も参加していた。また、大麦半俵ずつを計13軒分支給した。また病気の介護をしている人に50匁を心付けとして渡し、572匁を出村の出火で焼失した5軒に各10匁と、近隣の人々80軒余りに3匁ずつを授けた。

4月には、535匁を火事で焼失した家等に支出している。内訳としては、20匁ずつが6軒、10匁宛が5軒、5匁ずつが73軒であり、合計84軒に援助している。また、知人から頼まれて、その下女に大麦5升を授け、病人のいる家に大麦5升を贈った。さらに、未亡人となった知人の老母に銀50匁を送った。

5月には妻を失った人に香典見舞金の他に銀30匁を包み、諸物価高騰の折の生活難を援助した。また、地域の人々の病気見舞いとして銀10匁を贈った。6月には銀10匁を合力した。4月の福井木田での火事の時に類焼した人に、先例通り金1両を贈った。また7月には普請見舞いとして銀200匁を贈り、木田徳願寺に10匁授けた。さらに、お寺様へ御近火見舞いとして100匁を出し、計1貫94匁8分を計上している。

4月8日まで金鳳寺で行われた粥施行は終り、翌9日から中の寺で、津田・藤田家等を施主として始めた粥施行が、6月末までに終了した。7月1日より中の寺で御上による粥施行が始

内田惣右衛門の天保飢饉時における救貧活動

まっており、9月10日に終わった。続いて町の役人らが9月中旬より翌年2月まで実施した。4月8日まで金鳳寺にて施行した際に、出村の難儀人300人ばかりに米を施したが、誰も施主がない時期があり、この間に出村では餓死者が甚だしい数に昇り、親子や兄弟ともども一時に死亡した家もあった。このようにすさまじい状態だったので、内田本家と東西内田家で粥施行をした。

5月10日より永正寺にて粥施行が始まり、そのために必要な米を1ヶ月に10俵分、代銀1貫200匁の内、東内田家が240匁、西内田家が60匁、残り540匁を内田本家がもち、合計840匁を内田3家から出した。6月には、内田3家が前回同様に分担し、内田本家は540匁出した。7月10日には、米1俵を贈り、代銀75匁を出し、5月10日より合計1貫155匁を内田本家が出費した。

当時の米の値段は、上々米が125匁、平米が115匁であったが、江戸・大坂で15匁ほど価格が一気に下がるという変動があった。そこで、地域の人の生活実態を調べ、下夕町には52軒、上新町には45軒、計97軒と世話人2人の99軒、1軒につき20匁宛を見舞金として授けた。一軒当たりの内訳は、内田本家が13匁で、東内田が6匁で、西内田が1匁で、それぞれの合計金額は、順に1貫287匁、594匁、99匁であった。また、銀140匁を上新町の住民に貸した。その内訳は、内田本家が98匁、東内田家が42匁であった。

4月から5月5日まで米別売り場の損銀と煎粉施行のため13貫700匁を渡した。5月6日から御上から米100俵を80匁替にて御払いを命じられ、米の別売り場を設けた。300俵分を売り場に出し、6月29日迄に終わった。

5月には、失火があり、被害を受けた3軒に各10匁ずつ贈った。

6月土用前から米相場が下落し、上々米が95匁になり、7月に入ってさらに下落し、蔵米が70匁くらいになった。今年になって出入りした人が3人病死したので、生活苦を察してその3軒にお見舞いとして米半俵ずつを渡した。

お盆前に米価が50匁も下落し、出入りしている人10軒に米半俵ずつを渡した。他に永正寺に米1俵など、合計7俵分525匁を提供した。

7月6日に3回忌の法要で、難儀人314人と2人の世話人に、それぞれ1人5匁ずつ計580匁を渡した。7月7日には、「百六十匁 浄得寺御後室様御出御頼ニ付御飯米二俵代上ル」とあり、お寺の未亡人にも援助している。さらに、「乞食共は七月十一日粥施行大釜ニ白米三斗五升煎ニ而乞食共之内ニ達者之者ニ三人へ申付杓ニ而とらせ申候此代七十匁外に四匁下役へ心付」とあり、計74匁を出費している。7月12日には、下夕町の難儀人159人と上新町の難儀人159人および2人の世話人で、合計320軒分に合計1貫760匁を出した。1軒あたり10匁宛で、その内訳は、東内田家が2匁5分、中嶋家が1匁5分、西内田家が5分で、残り5匁5分を内田本家が出費した。7月12日には、御坊垣内出火見舞いとして153匁を出した。7月14日には、2人

の人に各10匁を渡している。

9月上旬には新米が次第に下落して42匁になり、9月下旬には50匁になったが、10月上旬には46～8匁と変動が激しい。

9月15日には、金津奉行所より呼び出しがあり、支配人のうち1人が罷^{まか}り出た。すると、三国湊は、昨年凶作であったが、難渋している人へ申し合わせて救済した支配人らの行いについて御家老中へ伝えたところ、奇行な行為だとお褒めいただいたので伝えておく、とのことであった。8月2日には、江戸表より、内田惣右衛門ら三国湊組合の奇特者に羽二重や帯地などを下さるといふ目録が届いた。

この秋は豊作であったが、11月には米値段が50匁余りで、難渋している人がいるだろうと推察し、出入りの人10軒に米俵を施行した。また、町内で倒れた人に20匁を合力した。

12月には、町内の老母に米1俵を授けた。それ以外に、老人のいる家庭などに、銀20匁を3人に、銀10匁を2人に、米半俵を2人に出した。

12月24日の出村の難儀人に350匁を渡した。これは、今年の700匁に比べると半減した。それ以外に、東内田家が150匁、中島家が125匁、西内田家が75匁と記されている。

12月25日の中の寺で行われた粥施行には、銀390匁を預けた。同日、米ヶ脇浦の23人へ銀115匁を授け、28日には、新保浦の40人に銀200匁を授けるよう渡した。26日には、194人と世話人に1貫617匁を出費した。1軒あたり10匁で、内田本家、東内田家、中嶋家、西内田家の負担割合は、従来どおりであった。

以上が、1837（天保8）年の『越前三国 内田家日記二』に記されている内田家の救貧活動である。これ以外に、金津奉行所への御歳暮や報恩講などについての記述もあるが、それらについてはここでは触れていない。

この日記では、12月24日に難儀人に350匁を渡したことを、昨年より半減したと述べている。12月26日には194人に渡したとなっており、その時点での対象者数は、前年の1836年末の252人よりは少ないが、1837年に援助した難儀人の人数の記載を単純に合計したら、延べ人数は倍増している。ただし、重複や不正確な部分があり、援助対象者の人数と支出金額の実態は、正確に把握できない。

4. 考察

（1）救貧対象者数

時期がややずれるが、1864（元治元）年に問丸の津田吉右衛門が収録した「三国鑑」によると、三国湊の人口は、6,437人であった。うち下夕町に4,193人（男性2,082人、女性2,111人）、上新町2,244人（男性1,084人、女性1,160人）で、男性は合計3,166人、女性は計3,271人であった（三国町史編纂委員会編1973：1-2）。この人口6,437人を分母とし、上記の『越前三国

内田惣右衛門の天保飢饉時における救貧活動

『内田家日記二』に内田家が援助した難儀人の人数として最も多く記録されている2月末の339人を分子として人口比を計算すると5.3%となる。この数値は、分母も分子も確かな数値ではなく、仮定的なものにすぎない。しかし、おおよその傾向をつかむために、この困窮者の数値がどれくらい多いのかを現在と比較してみる。すると、2004（平成16）年の全国的生活保護受給率は、全人口の約1%であり（厚生統計協会2006:157）、江戸時代に三国で内田惣右衛門らが救済した困窮者を、上記のように仮に人口の約5.3%だとすると、相当な多さだといえる。おそらく1836-7年の三国の人口は、分母とした上記の人口よりもやや少ないと推測され、また分子とした救済対象となった人の数は、単に2月の一時点で援助した数であり、実際の救済対象者数はもっともっと多かったと推測される。そうすると、実際の困窮者の比率はさらに高くなる。つまり相当数の困窮者を、内田3家らで個人的に救済していたことになる。

（2）救済事由・方法・性質

内田家が行なった救貧活動には、難儀人への施行のほか、火事見舞い、病氣見舞い、未亡人や高齢者・病人のいる家庭への援助等がある。また、普請見舞いや元雇用人への心付けもあり、妻を失った人や行旅病人のような行き倒れの人も救済している。

援助は、困窮する当事者や関係者から求められたり、御上（奉行所等）からの要請で行なったものもあれば、難儀を推察して心付けを渡したものもある。粥施行等の施行や米別売り場は、町内の役人や有力者達と相談し協力して行った公的な、あるいは地域共同体としての自治的性質のものであるが、『越前三国 内田家日記二』に記されたものは、私的な慈悲的・博愛的活動だと考えられる。

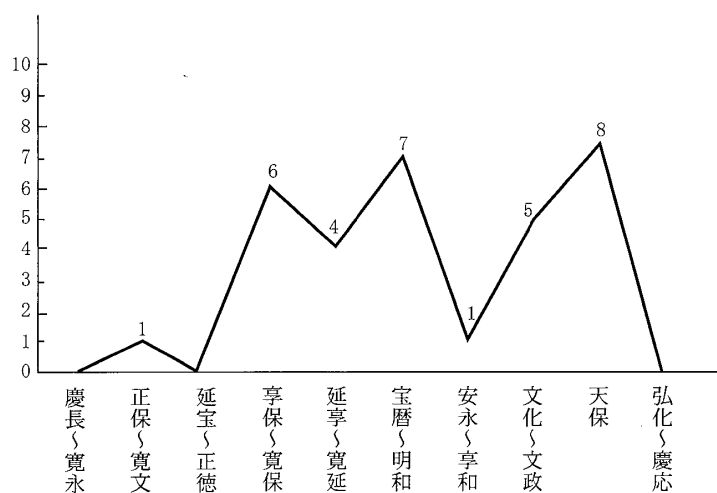
江戸時代には、飢饉にそなえて義倉・社倉などの備荒制度が全国的に実施されたが、三国湊には、「御米蔵」が10ヶ所あった。しかし、公的な救済制度が、とてもニーズに見合うものではなかったので生活困窮者が増加し、その窮状を見捨てられない有徳者による個人的な救貧活動が行われた。しかしながら、そのような私的な慈悲活動や地域の「町中合力」「町方施行」で補いきれるものではなかったので、餓死者・乞食が増大し、死を決しての一揆が全国で多発した。越前地方は、全国的にみても百姓一揆の多発地帯であったが、三国では1839（天保10）年に打ちこわしが発生している。図2・表1にあるように、越前藩では天保年間に8件の一揆がおきているが、そのうち5件は打ちこわしであり、激しい闘争が繰り広げられた。すなわち、このように過激な打ちこわしをおこすほどに困窮者の困窮度合いが激しかったと考えられる。

表1 百姓一揆の形態別分類

	逃散	愁訴	越訴	強訴	不穏	騒動	打ちこわし	村方騒動	計
慶長～寛永									0
正保～寛文	1								1
延宝～正徳									0
享保～寛保		1	1	1		1	1	1	6
延享～寛延						1	1	2	4
宝暦～明和	1					2	4		7
安永～享和							1		1
文化～文政		1		1		1	1	1	5
天保		1			2		5		8
弘化～慶応									0
計	2	3	1	2	2	5	13	4	32

出所：三上一夫（1974）『幕末の越前藩』福井県立図書館、福井県郷土誌懇談会、p. 45.

図2 年代別発生件数〔越前藩〕



出所：三上一夫（1974）『幕末の越前藩』福井県立図書館、福井県郷土誌懇談会、p. 45.

(3) 私的救貧活動をどう見るか

前述のような富豪の抛金や救貧活動は、貧富の差が拡大した江戸時代には他の地域でも行われていた。このような救貧活動については、貧者による襲撃や打ちこわしを回避するための富裕層の一種の治安対策としての目論見もあったという見方がされている（池田1986：117）。つまり、商品経済が発達してきた江戸時代に、飢饉による生活苦に苛まれた農民達が、私腹を肥やしている米商人や富裕層を襲撃して打ちこわし、焼き打ちをした。それを免れ自己防衛するために、支配機構を利用し「仁政」という名目で、町の富豪である有力者が貧者に施しをした、

内田惣右衛門の天保飢饉時における救貧活動

という構図である。

三国で発生した打ちこわしでも、米商人の家などが被害にあっている。それは、不作による米不足で米価が上がり、米の津出（移出）が禁じられたにもかかわらず、米を買い占め、港から積み出し商取引をして暴利を貪る悪徳商人に対する生活困窮者の怒りの爆発であった。その時に、米商人らは、米を半値で売る等の廉売を強要され、その約束をすることによって打ちこわしを免れることができたという（印牧1964：458-472）。このような一揆の歴史が、町の有力者達の飢饉時の米の廉売所や粥施行等の救貧対策実施につながっていたとも考えられる。したがって、内田惣右衛門の救貧活動の動因の一つには、そのような自己防衛的な側面もあったのかもしれない。

今回は、内田惣右衛門の救貧活動の実態を明らかにしたが、史料には、その動機については記述されていない。したがって、どのような思いから内田惣右衛門が私的な救貧活動を行ったのかは明らかではない。別の拙文で論じた和田幽玄による言い伝えが唯一の手がかりであるが、和田幽玄の伝記では、内田家を賞賛しており、上記のような自己防衛的な動機があったようには記されていない³⁾。むしろ、藩の不十分な公的救済を町内自治の役人の立場から温情的配慮で補っただけではなく、目の前で餓死・困窮する人を見捨てられないという人道的精神や仏教思想があったと推察されるような記述がある。歴史は歴史家によって創られる、といわれているので、歴史家の見方や価値観が歴史上の人物像を形作る。

また、個人的救貧や慈善活動の動因を考える場合、その時代背景である当時の社会情勢と習俗を抜きには考えられない。日本の他地域でも、中世以来、窮民の急場しのぎとしての食事を支給する「施し粥」という救済の慣習があり、江戸時代には、民間が資金を提供するものの藩の機構を利用して運営する救済制度が発達した。その代表的な例として、秋田藩の「感恩講」がある。これは、御用商人那波三郎右衛門裕生が捨て子や窮民の救済について諮問を受けたのをきっかけに、献金すると共に他の町人にも働きかけ、抛金をして貧民救済をする組織を1827（文政10）年に発足させたものである（池田1096：117）。このような町方の富裕層による救済を「町方施行」というが、御用達商人として厚遇を受け資産を形成した富豪らが、貧民救済の役目を担うことになった。

三国に関しても共通する面があり、飢饉時に町の有力者達が協議して、米の別売り場を設けることが習慣化した。しかし、それが、どの程度組織化されていたかは、十分に解明されていない。三国では、金津奉行所が一揆や打ちこわしを取り締まり、処罰すると同時に、その原因となる生活苦の対策として、米の不正の売買を禁じ、富豪達に米の別売り場を設けさせるなどして困窮者対策を実施した。しかし、廉価の米も買えない困窮世帯が続出しており、そのような世帯に対して、内田3家は、私的な救貧活動を継続的に行なった。こちらのほうは、一人当たり10匁として、その分担率を内田3家等で割り当てをきめており、慣習化していた。このよ

うに慣習化するほどに、内田家の私的な救貧活動は、繰り返し行われていたのである。

(4) 内田惣右衛門の経済的・社会的貢献

三国で内田家が出費した金額は、相当な額だったと考えられる。実際それが、どれほどの金額になるかについて、現在の貨幣価値に換算するとイメージしやすいが、容易には換算できない⁴⁾。江戸時代では、国内でも場所や時期による貨幣相場の変動が激しく、諸物価の差も大きく、貨幣価値を定めることは不可能だからである。さらに、生活構造や社会システム・社会経済情勢も、江戸時代と今では、まったく異なることや、内田家が負担した金額の総額が正確に把握できないという理由もある。

しかしながら、上記のように、内田惣右衛門が三国での救貧事業のために負担した金額は常にトップで、貢献度がずば抜けて大きかったことは確かである。また町内自治の役人としての救済事業以外の個人的な救貧活動にも惜しげなく大金をはたいていた。それは、多額の出費ができるくらいの豪商であったからであるが、資産を死蔵せず浪費せず、公的私的に救貧活動に喜捨していたことが、今回の史料検討によって追認された。

これによって、内田惣右衛門の百回忌を記念して和田幽玄が発行した内田惣右衛門伝に綴られた美談が、事実であることが裏付けられた。

内田惣右衛門が、救貧のためにいかに多くの出費をし、いかに救済活動に貢献したかについては、上記のとおりである。

注

- 1) その他、以下3点の拙文がある。大塩まゆみ(2006)「豪商内田惣右衛門の社会貢献—福井県三国の救貧対策と米騒動防止—」『ふくい地域経済研究』第3号、大塩まゆみ(2007)「“陰徳の豪商”内田惣右衛門の社会貢献—江戸時代の救貧活動とその伝承—」『福井県立大学論集』第29号、「福井県三国の豪商 内田家に関する史料」『福井県立大学論集』第29号。
- 2) 原文の引用については、なるべく原文どおりの表記にしているが、くずし字や旧字体・異字体については、現在通行の漢字・字体を使うこととした。□は、判読不可能な字である。また、苗字の漢字が、原本の引用ページによって異なっている場合があり、そのまま表記しているので、おそらく同一人物だと思われる場合も、異なる漢字が使われている。
- 3) 大塩まゆみ(2007)「“陰徳の豪商”内田惣右衛門の社会貢献—江戸時代の救貧活動とその伝承—」『福井県立大学論集』第29号参照。
- 4) 江戸時代の貨幣価値を現代の円に換算する方法としては、米価や物価を基準とする方法と賃金水準で換算する方法がある。その結果、換算の方法によって、金1両=5万円~30万

内田惣右衛門の天保飢饉時における救貧活動

円の開きが出てしまう。銀・銭の相場も時期による変動が大きく一定していない。

参考文献

- 池田こういち（2006）『古文書も読めるくずし字辞典』学習研究社。
- 池田敬正（1986）『日本社会福祉史』法律文化社。
- 印牧邦雄編（1964）『三国町史』三国町役場。
- 加藤貞仁・鏡啓記（2002）『北前船 寄港地と交易の物語』無明舎出版。
- 京都造形芸術大学（2002）『古文書を読む』角川書店。
- 厚生統計協会（2006）『国民の福祉の動向・厚生指標 臨時増刊・第53巻第12号』通巻835号。
- 佐久高士（1966）「天保の飢饉と餓死者数について」『福井大学教育学部紀要』社会科学第16号。
- 中田祝夫・和田利政・北原保雄編（1994）『古語大辞典コンパクト版』小学館。
- 三上一夫（1974）『幕末の越前藩』福井県郷土史懇談会。
- 三国町史編纂委員会編（1973）「三国鑑」『三国町史料 町内記録』。
- 三国町百年始編纂委員会編（1989）『三国町百年史』三国町。
- 吉田叡（1975）「江戸時代後期に於ける福井藩御用商人の一考察」『福井県地域福祉史研究』第5号。
- 若尾俊平（1991）『図解古文書入門事典<新装版>』柏書房。
- 和田幽玄（1934）『三国の華 陰徳の人 内田惣右衛門翁』信の日本社。